5

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2011年01月13日 11：56：00

入館証番号：

＜請求票＞
Call Slip

2210
20

資料名：朝鮮史概説

巻次　：

著者名：三品彰英／／著
出版者：弘文堂　頁数　：179p
大きさ：19cm　出版年：1952

所蔵館　：中央
所蔵部署　：1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所　：1/66A 中)B1書庫A
資料ＩＤ　：1126861232

一	社	人	自	東	新	力	事
↓							
一	社	人	自	東	新	請求	報告

MB１	ﾏｲｸﾛ	B1	ｱﾙﾌｧﾍﾞｯﾄ	原紙	縮刷	
MB２	ﾏｲｸﾛ	B2	洋	中	朝	

行	1F	B1	B2		
多	児	青	1F	B1	B2

切り取り

2011年01月13日 11：56：01

入館証番号：

Call Slip

＜請求票＞(控)

書名
資料名：朝鮮史概説
巻次　：
著者名：三品彰英／／著
出版者：弘文堂
出版年：1952
大きさ：19cm
頁数　：179p

所蔵館　：中央
所蔵部署　：1階資料お渡し・返却カウンター
配置場所　：1/66A 中)B1書庫A
資料ＩＤ　：1126861232

請求記号
2210
20

序 1～2
目次 1～6
本文 1～23, 156～172

朝鮮史概說
三品彰英

東京都立日比谷図書館
昭28.1.28 初受
30779

序

未曾有の動亂下にある今日の朝鮮は、われわれと近親な民族の現實であるだけに同情に堪へないものがあるとともに、この半島の歴史が直ちに日本の運命と深くつながつてゐることを想ふ時、改めて周到な研究と冷靜な批判の必要を痛感する。たゞ目下朝鮮史の研究は、資料的不利とさし迫る現實感の故に却つて困難であるが、それだけに又科學的な究明が要求されてゐる。私は不日再び朝鮮史を新しく書く機會の與へられることを念願して止まない。

本書は嘗て教養文庫の一冊として執筆されたものに現代の部を追補したものであり、從つて舊稿の部分は朝鮮が日本の一部としてあつた現實と、當時の學界の水準に於いて書かれてゐる。勿論歴史は何時如何なる狀態のもとに書かれても、常にその民族なり國家なりの性格を詮表してゐなくてはならない。今回は出版者の事情で舊稿を主として利用されたの

もそれだけの意義のあることであり、併せて著者自らの責任を將來に於いて果し度い。

昭和二十七年八月

著　者　識

朝鮮史概說　目次

一　序　說……一
一、朝鮮史の他律性……一
朝鮮史とは朝鮮半島に於ける歷史…半島の附隨性、周邊性、多隣性とその歷史的性格…對外關係事項の重要さ…支那の典禮主義主智主義的支配…滿蒙の征服主義主意主義的支配…日本の抱擁主義主情主義的支配…事大と交隣…イデオロギーの缺乏…黨閥性と依賴性と雷同性…宿命論者…考證學の不振
二、朝鮮文化の基潮……二
韓民族の古代文化…氏族組織と原始神敎…佛敎儒敎の輸入…中世的理念としての佛敎…佛敎と民族精神…近世的理念としての儒敎…近世に於ける氏族精神の再生…書院の近世的性格…民間文化と官邊文化の對立…諺文と漢文
三、神話と時代精神……三
神話と歷史…新羅の赫居世神話…氏族意識と原始宗敎性…高麗の塏君傳說…民族意識の昂揚…李朝の箕子傳說…事大慕華の精神…文敎主義と藝術性の

否定…民族的美點の殺倒…朝鮮史の時代區分 ……三四

二　古代——古代國家の發展 ……三四

一、朝鮮古代史の主流と時代區分……三四
序曲的存在としての樂浪…ワキ役としての高句麗…朝鮮史の主役韓族…古代史の代表者新羅…時代區分

二、支那郡縣と黎明期の韓族……三八
漢四郡の設置…韓族の原始社會…高句麗の建國と發展…樂浪帶方二郡の滅亡…高句麗の歩める荊棘の道

三、韓族に於ける氏族國家の發生……四四
種族聯合より國家へ…新羅百濟二國の成立…弁韓地方に對する日本の保護政策…新羅國家の原始的組織

四、氏族國家の成長と日麗の南鮮經營……四九
日本の南鮮保護政策の進展…高句麗の南進…日麗交戰…新羅の王號「麻立干」とその時代

五、新羅の半島統一……五四
「麻立干」より「王」へ…法興眞興王代の新羅の發展…佛教と新羅精神…百濟の民族精神の消失…隋唐の麗濟遠征と二國の滅亡…新羅の半島史的自覺と統一事業

六、新羅の盛時……六三
唐文化の流入…州郡制による中央集權…王權の新舊二面性…貴族政治…佛教藝術…朝鮮文化の纖細美…藝術的民族

七、新羅の衰亡……六八
新羅史に於ける王位簒奪の稀少…王位簒奪の發生と新羅史の變質…歴史舞臺の移動…高麗太祖王建の建國と新羅の滅亡

三　中世——高麗王朝……七四

一、高麗史と時代區分……七四
王氏始祖傳說の歴史的意義…貴族政治と血緣…王廷の血緣關係よりする時代區分…その政治史的意義

二、王權の確立……七九
獨立專大兩意識の交錯…集權的王制への進展…宗室の近親婚…地方官制の整備…集權主義と封建主義の重複…教學の振興…契丹の入寇
三、外戚の專權……八六
安山金氏と慶源李氏…貴族政治の代表者李資謙…私學の發達…學派と血緣の時代…貴族政治と佛教…寺院の俗界勢力…僧妙清の叛亂
四、武臣の執政……九八
毅宗の遊幸…武臣のクーデター…尊文蔑武と事大主義…武臣政治の開始…實力の時代…崔忠獻…貴族意識の否定…社會史的意義なき政變…政治の私的化、重房、都房、三別抄…貴族の逃避文化…武臣に反抗する佛寺勢力
五、蒙古への服屬……一〇五
武臣政治を否定するもの…蒙古帝國の出現…武臣の抗爭精神…武臣勢力の沒落と蒙古への服屬…元室に依存する高麗王權…元朝の支配…元寇と高麗
六、高麗の滅亡……一一
麗王の反元意識と自已矛盾…親元派と向明派…李氏革命

四　近世——李氏朝鮮……一一五
一、李朝史の時代區分……一一五
李朝の指導精神…儒教史による時代區分…朋黨史と李朝史
二、文治政治の確立……一一八
天下の義主を見ること…革命の智謀的技巧…私田の革改…學ぶことより出發する政治…教學の振興…法治主義の下に於ける王權…史筆
三、宮廷と儒林……一三八
儒教に對する宮廷と佛教との類位性…儒林の斥佛…燕山君の役割…士禍の反復…王廷勢力への儒林の抗爭…士禍の歷史的意義
四、朋黨の成立……一三四
近世史の合理性…義の哲學と政治悲劇…朋黨の發生…壬辰丁酉の役
五、黨爭の激化……一四一
黨爭禍中の王廷悲劇…清軍入寇…朋黨入宋時烈…觀念的政論の行方…吏胥の弊
六、王權の中興……一四七

黨論の蕩平……王權の振興……垂簾の政
七、日韓併合……一五一
日鮮修好條約と新時代の出現……事大黨と獨立黨……朝鮮史的なるものの止揚……
朝鮮史の日本史的終焉
五　現代――總督政治とその解放……一五六
一　總督政治と朝鮮の近代化……一五六
朝鮮近代化の問題……日本統治に對するレジスタンスの基盤……武斷政治と民族
運動と文化政治……朝鮮社會の古代性……日本の非常時體勢と日鮮一體化運動
二　獨立と內戰……一六四
資本主義的支配のもたらすもの……共產主義の擡頭と獨立運動……國外に於ける
反共民族主義者……米ソの勢力圏……南北の抗爭
附　錄……一七四

朝鮮史概說

一　序　說

一　朝鮮史の他律性

日本史を "the Mikado's Empire" と題して敍述を試みた一史家は、朝鮮史に對しては "the hermit nation" なる副題を與へた。この副題が果して朝鮮史の性格を適切に言ひ表し得たものか否かは、ここに問はないとして、少くとも民族系統を同じくし、且類同せる風土に成長した日鮮兩民族が、其の歷史と性格に於いて、甚しく相違せること、この論題の違ひ程度のものではない。如何にして斯くは相違し來つたものであらうか。

人類の廣範な歷史を、地理的に限定して考察することは、實際問題として甚だ便利であるばかりでなく、この地理的要因は、歷史の類型的把握を可能ならしめる一義的なるものである。今若しここに概說せんとする朝鮮史を、簡明に定義せば、そは朝鮮半島に於ける歷史なりと提言し得べく、卽ち朝鮮半島てふ特定地域に生起した歷史に外ならない。一見かかる定義は、甚だ恣意的にして、便宜的提案たるに過ぎぬと見られなくはないが、然し

日比谷図書館

歴史の理解が、その個性の認識にありとするならば、この半島てふ地理的條件ほど、著しく朝鮮史を個性づけるものは他にあるまい。朝鮮と滿洲とは相互に地を接し、政治史の上でも、高句麗の如く、滿鮮に跨つた國家もあり、又民族的には滿鮮の交流移動も少からず行はれて來、民族學的にその文化境域線を、地形に從つて半島の基底部に引くが如きも亦不可能である。このことにより滿鮮一聯てふ考へを抱かしめ、滿鮮史一如と見る論者もないではないが、然し吾人はかかる聯關よりも、朝鮮史と滿洲史との間に著しい性格的相違の存すること、時にあつては、その個性が全く對蹠的であるとさへ思はれる節々の多いことを、より強く主張せざるを得ない。

さて朝鮮史を規定する最大の要因として、その半島てふ地理的條件を指摘したが、然らばそれは如何なる方式をとつて働きかけ、又如何なる歴史的性格を彼等に賦與したであらうか。アジヤ大陸の中心部に近く附着せるこの半島は、政治的にも文化的にも、必ず大陸に起つた變動の餘波を蒙つたと同時に、又周邊位置の故に、常にその本流からは逸れて居た。ここに朝鮮史の著しい特徴たる附隨性の因由する處が理解されよう。今假りに之と等しい地域と民族が、大陸の中央位置に存在したとするならば、そこには決してかの半島史的

なるものは生れ得なかつたであらう。中央位置にある民族の歴史は、一つの歴史世界の建設にまで發展するか、さなくば滅亡である。朝鮮史はしかく華々しい歴史世界の建設ではなく、それと對蹠的なる、云はば細く長く續く半島的歴史である。

然云へ朝鮮半島の持つ地理的條件は、上記の如き周邊性のみに盡くるものではない。朝鮮は大陸の滿蒙部と接壤して居ると同時に、海洋を隔てて、支那及び日本と結び付けられ、海洋の交通性の故に、これら有力國家と近密な關係に置かれ、又最近世にあつては歐米諸勢力の接近をも容易ならしめた。このことは周邊位置にある朝鮮に、多くの有力隣國を持たしめ、特に大陸の歴史世界の中心たる支那との海上交通は至つて便利であつた。斯く周邊的であると同時に、多隣的であつた朝鮮半島の歴史に於いては、この二個の反對作用が、或は同時に、或は單獨に働きかけて、甚だ複雜多岐な樣相をさへ呈せしめ、東洋史の本流からは逸れて居ながら、常に一個乃至はそれ以上の諸勢力の餘波が輻輳的に働きかけ、時には二個以上の勢力の抗爭下に曝され、時には一つの壓倒的勢力に支配されたりした。故に朝鮮史は內容的にも、對外關係事項によつて占められる部分甚だ多く、且この國外諸勢力との關係を中軸として、朝鮮史が展開して行くが如き觀をさへ呈して居る。このことは政

治史に於いてと同樣、文化史の面に於いても等しく云はれる。されば「發展」てふ史的觀念に基いて、朝鮮史を理解し論考せんとする場合、吾人はそこに辨證法的歷史發展の跡の甚しく乏しいことに氣付かざるを得ないであらう。實に朝鮮史は、その客觀的動向に於いて、自由を持つこと眞に少い歷史である。

朝鮮史の半島的條件より來る最も顯著な特性として、それに働きかける國外諸勢力との關係を述べたが、次にこの國外諸勢力の働きかけ來る方面及び其の性格が考察されねばならない。それのよつて來る方向より云へば、滿蒙、支那及び日本の三方面であり、且この三勢力は、それぞれに際立つた個性を持ち、その個性に從つて對鮮關係を著しく特色付けて居る。先づ支那は、典禮主義的、主知主義的なる點にその特性が見られ、彼の對外策は、儒敎の指示する中華外夷の觀念をその主なる指導原理として之に臨んだが、然し又彼はかうした外衣を纏ひ、中華的面子を保ち乍ら、一面極めてプアンタヂーの乏しい實用主義的な行き方をも忘れない民族である。時には武力による事もあつたが、德治文治を以て理想となし、高所より蕃夷に臨むを常としたが、かかる方策の向け得らるる對象として、朝鮮こそは全く恰好な蕃夷であつた。朝鮮亦その典禮主義的支配下に隷屬して從順であり、やがて理想的蕃夷として、遂に蕃夷的なるものを脫却し、「文物禮儀の國」或は小中華とまで支那より稱讃され、自らも亦誇りとするに至つて、支那的支配は、完成の域に達したものと云ひ得よう。が斯く典禮的名譽を與へ、その慕華思想に訴へて、時には朝鮮をして北方勢力の牽制に利用せんとする、支那一流の實用主義政策が繰返へされ、爲に朝鮮自身窮地に陷り、災厄を蒙つたこと一再ではなかつた。

次に滿蒙勢力である。滿洲人のそれと同じく、征服そのものである。滿蒙的風土より來るその强烈なる精神と、半島的風土より生ずる纖細にして優弱なる精神との對立が其處に見られ、恰もかの蒙古の武將達の多くが、朝鮮の美女を娶つたてふ著明な史實が之を表徵して居よう。彼等は支那中原にさへ武力的征服を恣ままにしたのであるから、朝鮮に對して鎧袖一觸、武力的征服者として跳梁したことは寧ろ當然で、北夷の寇略に對しても、朝鮮は確に小中華であつた。然しその抗爭力の弱さの故に、却つて征服者は單なる征服慾を滿し、或は支那中原に對する牽制的背後勢力とならざれば足れりとする、頗る鷹揚な遊牧民的態度を以て之を被覆し、半島の政權をまで奪ひ去らうとしたものではなかつた。偉大なる、然し政治と文化を伴はない力のみの征服であつた。

最後に日本である。中世に於ける我が海賊の活動に於いて見られる如く、また壬辰役に於けるが如く、我が海外活動には、海洋民族的飄風的性格を指摘する事も出來るが、然しそれは一半面に過ぎず、これ以上の重大なる他の面の存するを忘れてはならない。卽ち古代の我が朝鮮經營に於いて、又最近世のそれに於いても同じく見られるが如く、それは征服主義でもなく、利己主義に出でたものでもない。古くは百濟なり任那なりを保護し、以て彼等に國家を樹立せしめるにあり、そはまこと平和的且共存的支配とも云ふべきもの、蒙古の如く意志的征服的でもなく、支那の如き主知的形式的でも亦なかつた。之等に對して若し名目的に云ふならば、日本のそれは主情主義的、共存主義的であり、彼我の別を越えたよりよき共同世界の建設を念願するものであつた。この精神は今日に至るも斷じて不變の根本精神である。日本と朝鮮とは、民族的に云つても、最も近親なばかりでなく、その風土の類似また著しいものがあり、纖細と多樣と變化とに富む風土によつて、主情的藝術的性格を與へられて居る點に於いても、亦兩民族は甚だ類似してゐる。新羅の古都慶州の郊外で、我が大和盆地の景觀を追想した旅行者は、又新羅の鄕歌を讀んで、その中に萬葉の心を偲ぶことが出來るであらう。嘗て朝鮮と同じきこころの持主として生ひ出し者、し

かも極東諸族に魁けして世界史的に成長した日本が、朝鮮を同胞として共存することは、今日の朝鮮の歷史を平和ならしめてゐる。たとへ多くの矛盾と民族反抗の問題を含んでゐるとしても、そこに眞の共存が理想として追求されねばならぬ。

以上述べた如く三方面よりの勢力が、それぞれの個性に應じて複雜な交錯をなしつつ、朝鮮てふ協同體の成立と發展に寄與して來たが、今その歷史を顧る時、朝鮮は支那の智に學び、北方の意に服し、最後に、日本の情と共存して、ここに始めて半島史的なるものを止揚するの時を得たのである。

さて國外勢力との關係が斯くの如きものであつたとすれば、朝鮮史は、所謂事大交隣の歷史であり、外來文化受容の歷史である。事大とは、宗主國より國王を承認され、之に儀禮を致すを云ひ、交隣とは諸外國特に日本に接して、修交を失はぬ事を云ふ。事大主義の最も發達した李朝に於いては、宗主國の正朔を奉ずるのみならず、王の嗣位はじめ冊妃、建儲、追崇等悉く宗主國の承認を經、皇帝の登極、聖節、正旦、冬至、喪祭等には必ず使節を遣して表文を上つた。事大主義なるものは、絕對的存在と考へられた國外勢力に服從し、その權威の下に藩屬して、依存主義によつて國家を維持せんとするものであるが、こ

の權威の中心が分立したり、或は一から他へ移行したりする場合、卽ち隣邦勢力に變動が生じた場合、その都度、併存する各勢力に、或は新舊の二勢力に、それぞれ依存せんとする主義政策の對立分爭が國內的に生じ、ここに朝鮮特有の政爭が見られ、史的轉換の重大時期が現はれる、近世に例をとれば、崇明派と從淸派、從淸派と親日派、親日派と親露派親米派等の抗爭がそれである。故に國外諸勢力の歷史の考察こそ、朝鮮史理解に對する不可缺の前件であらねばならない。對立は史的發展の基本條件であり、對立の綜合され行くところにのみ發展が考へられるが、然し右に見られる朝鮮史の分立對抗は、彼等自らの內的體驗から必然的に現れ來つたものでなく、またその對立の解消も他律的になされた場合が殆んどである。彼自らの社會意識よりする對立ならざるが故に、そこに自らの生活を進展せしめるところの辨證法的發展を期待すること又困難である。

他律的權威に依存して自己を主張せんとする精神は獨立性を缺き、其處に人々互に相依らんとする黨與的性格が育成されるは自然である。有力なる權威の下に集り、或は特殊な社會結合の力に依存して、黨閥を結成することは、朝鮮の著しい國民性として、その政治面にも、又社會面にも齊しく顯著に現はれて居る。卽ちこの黨與性は、經濟生活をはじめ

各般の社會生活を通じて、金融組合及び各種の相互援助組織を發達せしめ、或は又社會の基本的結合力たる血緣關係に依存して、氏族的道德を發達せしめる等、好果的方面も決して尠くなく、朝鮮社會の美風とされる節々もあるが、然し他方幾多の弊害を殘し、民族的缺陷と看做され來つた方面も尠しとしない。かの李朝五百年間、その殆んどを占めた朋黨政爭史、或は社會生活に於ける所謂一門一族（イルモンイルシヂョク）に賴る同族依賴主義の如き、その弊風の代表的なるものである。朋黨の爭ひは、自らの生活意識の對立より生じたものでなく、朱子學の原理、特に禮論に依るところの一種の依存的對立なるが故に、綜合されて進展するの時なく、何時までも意味なき對立として、果しなき抗爭を續けたのである。その抗爭の時間的長さに於いては、實に世界的記錄と云ふも過言でなく、眞に驚異に價するものであつた。またこの黨閥性が、臨機的に熱情を伴つて現はれ來る時、彼等の民族的特性の一たる雷同性となり、朝鮮の政治的社會的事件が、計畫的組織的であるよりも寧ろ、這般の性格によつて色づけられて居ること屢々なるを見遁してはならない。一枚の檄文、巧みな演舌が、強い反響を呼ぶ國民である。

彼等は又宿命論者である。蓋し、他律的世界觀に宿命的人生觀の伴はれるは、當然の歸

結であらう。朋黨政治に於ける身上の有爲轉變は、かほどまで政界に愛著を持てる彼等に「嗚呼士大夫は朝に得ざれば、則ち山林のみ」（八域誌）と悟つたあきらめの言葉を出さしめて居る。宿命觀は、人それぞれの性格に從つて、逃避、幽欝、刹那的享樂などの道を選ばしめるが、何れにせよ彼等は、朗かに笑ふことを忘れた國民であり、ここにかの the hermit nation の語を想ひ出す。吾人は、彼等の民族的歌謠とも云ふべきアラランの歌詞と調子に、或は又長煙管から緩々棚引く紫の煙に、あきらめ的な長閑さと淋しさを感ぜざるを得ないのである。

他律性に由來する精神は、政治や社會生活のみならず、ものの認識の仕方、例へば學問研究の上に於いても、朝鮮的特徴として顯著に現はれて居る。朝鮮の學藝といへば、直ちに朱子學を聯想する程に、この學は永きに亘つて獨占的に流行したが、それに引き換へ、考證學や文學は甚だ振はず、特に考證學は宗主國清朝に盛行した學問でありながら、朝鮮に於いては一人の金正喜以外に、名ある考證學者を出して居ない。宗主國のものを學び倣ふに汲々たりし朝鮮學徒にして、之は又以て珍しい現象であつた。朝鮮精神にあつては、考證學の如く、歸納的實證的に自己の見解を樹立したり、或は己が體驗から文藝作品を獨創したりするよりも、最初より與へられてゐる原理に準據して、演繹的にものを解し批判することが、彼等により適した思考法だつたからであらう。これ事大的思考法とも呼べば呼べよう。

二　朝鮮文化の基潮

朝鮮史の著しい特徴として、その他律性を擧げたが、然し朝鮮史はどこまでも朝鮮の歴史であつて、決して支那史、滿洲史の一部でもなく、勿論日本史の内に包含さるべき性質のものでもなく、又それらの部分的組合せでもない。國外勢力の支配が顯著であつたにしても、結局この外力によつて動かされ、支配されたものの、朝鮮それ自體であつたことは云ふまでもない。故に朝鮮史の問題は、外部的勢力が如何に働きかけたかにあるのでなく朝鮮がそれを如何に受け容れ、如何に動いたかになければならない。即ち朝鮮民族がその政治に於いて、又その文化の全般に亘つて、外的支配を受けつつ、自らを育て上げて來た歴史の考察でなければならない。曩に他律性を朝鮮史の特徴として指摘したが、そは朝鮮史自身の成長に對して、外的勢力の制約が、如何に强大であつたかを縷べたに過ぎない。

さて朝鮮史に於ける基本的なるもの、或はその固有文化とも云ふ可きものは何であつたか。これは朝鮮史を概觀し了へた後に、初めて充分に理解さるべき問題であらうが、然し又一應は最初に顧慮して置かねばならない問題でもある。假に今大略的な把み方でも、それを指摘し得るならば、その基本的固有的なるものが、外部よりの指導によつて、如何に朝鮮史式に發展し成長したかを理解する目安ともならう。

文化の固有的基本的特質を、該民族の古代乃至原始生活の内に求めることは、簡便にして屢、試みられる便法であるが、この意味で先づ朝鮮民族の原始生活に考察を向けて見よう。原始文化必ずしも凡て民族固有のものたるわけでなく、又それが基本的特質として、民族の歴史を通じて何時までも存續するものとは限らないが、然し外來文化の影響を受けること僅少にして、且それが生得的なる點で、民族の古代文化の考察は、這般の目的に沿ひ得るところ決して少くない。さて韓族の古代文化は、氏族制社會をその基礎とするものであつた。勿論これは朝鮮古代に限らず、廣く古代社會一般に就いて、等しく云はれるところであり、今かかる普遍的樣相を以て、朝鮮文化の基本的特徴とすることは、謂はれなきに似て居るが、然しこの原初的なるものが、その後の歴史過程を經て、如何に朝鮮史的

に變化し發展したかを見ることによつて、所期目的の幾何かを滿たし得よう。そもそも古代氏族社會は、血緣を紐帶とする社會集團なる點に於いては、人倫的であり、祖神の信仰と祭儀を中心とせる集團なる點に於いては宗教的であり、且この古代の人倫的宗教的社會集團は、その由來と機能を、神話によつて説明され權威づけられて居るところの前論理的世界にして、この點本質的に中世近世のそれから區別せらるべきである。韓族の古代國家組織もこの二點で特徴付けられて居り、例へば後に詳述する如く、新羅の王は鬼神に仕へることを意味する次々雄てふ稱號を持つて居り、又時には麻立干てふ族長的なる稱號を負ひ、且その王位には朴・昔・金の特定氏族の首長が登ることになつて居た。なほこの王統は右三氏族各自の始祖神話によつて權威づけられ、その機能が説明されて居り、王權發達の度に於いて、後代の國家と甚しく相異するものであつた。かかる性質を有する韓族の古代社會が、時代と共に發展して行く途上、彼等を新しく導いた二つの指導精神、佛教と儒教、が支那より輸入されたことは、朝鮮文化發展の將來を決定したものと云つてよく、即ち民族の持つた固有的基本的なるものが、ここに佛教的乃至儒教的に發展せしめられ行くことになつたのである。この兩教はかなり早期に半島に傳へられ、最も遲れた新羅に於いても、

六世紀の頃には已でに輸入されて居た。この佛教と儒教とは、彼等自らの所持した上記古代文化の二面、即ち宗教的面と人倫的面とにそれぞれ結合し、それを高級文化的に發展せしめることになつたのであるが、この新指導精神は哲學的理論的なる點に於いて、古代の神話的なる世界と相違して居り、この意味で古代的なるものを否定しつつしかもその精神を復興再生せしめたものと云ひ得る。然し佛教と儒教とは同時に等しくその指導的地位に就いたのではなく、時代的に云つて先づ佛教が、次に近世に至つて儒教が指導權を獲得し、或は又他を壓倒して絶對的支配を敢へてしたのであつた。初め佛教が新羅及び高麗時代を通じて指導的地位に立つたが、これ蓋し、古代生活の連續たる統一時代の新羅及び、それに續く中世高麗にあつては、國家的にも社會的にも、宗教的關心がより大であつたこと、及び佛教の持つ儀禮的藝術的特質が、彼等の古代文化に接續し易かつたことに歸因するものと解し得よう。勿論彼等の佛教受容の仕方は、彼等自らの持つ關心によつてなされたこと云ふまでもない、即ち先づ祈禱教として、また國家的には護國教として、換言すれば彼等が從來固有神教に求めたところのものが、ここに改めて佛寺の優れた莊嚴と儀禮を通じて滿されたのである。寺塔の建立、盛大なる法會の勤修は勿論、かの高麗時代に於ける大

藏經板雕造の大事業の如き高級文化的事業が、實は高級な學究的要求からでなく、敵國降伏てふ祈禱的呪願的要求に出で、それ故にこそ驚嘆に價する大事業の完成となつたのである。これ等の點では、佛教は固有神教に代るものであり、信仰的には朝鮮佛教となり得たが、然しその反面獨自の教義的究明を缺き、從つて朝鮮佛教の教義的成立即ち眞の朝鮮佛教なるものは遂に現はれずに終つた。

斯の如く佛教が固有信仰と習合したことは、一面それが民族精神と結合したこととなし得るであらう。或は逆に、民族精神が佛教信仰によつて存續し得たとも云ひ得る。從つて佛教信仰の内に、特に佛教と習合したかの纖緯信仰(風水信仰)の内に、強い民族意識が潜在し、時にあつて民族獨立の精神として、歴史の表面に現はれたこと一再でなかつた。中世に於いては勿論、最近世に於いてさへ、固有神教はさうした政治的民族的使命を持ち、民族の獨立運動をさへ指導したことは、これまでの史實がそれを物語つて居る。この點、儒教が專大慕華精神の基底となつたのと、著しく對照的と云はねばならぬ。新羅や高麗で、僧軍が外敵防禦の爲に活躍し、かの儒教主義の李朝時代に於いてさへ、壬辰役及び金人清軍の入寇に際し、彼等が愛國的熱情を以て國事に勤勞したるが如きも、かかる視角から注意されてよからう。

中世が佛教時代と稱し得るに對し、近世は正しく儒教時代である。儒教は先づ孝悌の道を教へ、家族道德を尊ぶを以てその第一義として居る。李朝の斥佛論者が、宋儒の說を襲用して、佛教が人倫を毀棄するを指摘し、以て罪惡の極として非難して居るは、儒教の第一義とする處を以て、佛教に缺けたるところを論難したものである。佛道に入ることは出家すること、姓氏を廢棄して釋の一氏に歸することであり、この意味よりすれば、家庭生活乃至氏族意識そのものの否定である。世界人類的宗教にまで進んだ佛教にあつては、その教理上原始宗教の持つ氏族意識の衰退せるは寧ろ當然であるが、之に比して儒教は、宗教的には發達の度低く、家廟を中心とする儀禮の內に、氏族宗教的なる原始性を多分に保有して居る。古代氏族社會に於いては、族長の實修する祖靈の祭儀が、社會生活の中心をなす最大重儀であつたが、ここに近世の儒教は、這般の古代氏族意識を新しく發展せしめる指導原理として、近世的に採擇されたのである。特に近世的と云つたのは、古代のそれが神話的呪術宗教的に基礎づけられて居たに對し、近世にあつてはその理性的要求に從つて、合理的なる倫理說をその基礎に持つ氏族社會として更生されたのである。李朝に於ける所謂「文公家禮」の流行の意義がここにある。家禮とは家廟を中心とし、祖先の祭儀實

修を通じて同系血族が集族し、又それによつて次第づけられた社會團體の謂はば憲法である。儒教就中朱子學が全盛を極めた當時に於いて、朱子哲學の內、それ程重大性を認められて居ないこの家禮が、獨り朝鮮社會の中心問題となり、社會の各層にまで行き渡つて實踐された所以のものは、彼等の持つ關心が那邊にあつたかを明瞭に語るものである。李朝社會が、儒學を通じて眞に我がものとして受容し得たものは、朱子の哲學に非ずして、それに附隨した家禮思想であつたと云ふも過言でない。家禮の實踐には、各成員の族內的關係を明示する必要があり、ここに族譜の發達を促し、やがて族譜の作製に異常の關心と努力が拂はれるに至つた。朝鮮の族譜はその特徵として、直系を示すのみならず、傍系のすべてを網羅する橫系圖をも揭げ、外戚關係まで明示し、所謂九族の內容を確實にして、血族團體の構成を鞏固にしたもの、彼等にとつてこの血族精神こそは、最高の價値ある社會原理であつた。

氏族制社會はその機能に於いて相反する二面を持つてゐる。卽ち族內的には强固なる統一精神を培ひ、理想に近いまでの社會統一體を形成するが、族外的には强い排他精神を養ひ分立對抗の勢ひを助成する。氏族精神は、族內の個人に對してはその個人性を否定するが

飜つて氏族以上の統一體、例へば國家的統制などに對しては、分立的勢力としてその統制を妨げ、一種の個人と國家との中間的存在となるが故に、かかる社會にあつては、自由なる個人の活動は制限せられ、族内依存の精神を培ひ、獨立精神を缺如せしめると共に、他方又完全なる國家的精神の成立を甚しく阻害する。云はば彼等には家（氏族）と天下があり、個人と國家は二次的存在たるに過ぎない。古代氏族社會から統一國家が完成されるには、この氏族の分立意識を否定することが先決問題であり、而してこの否定は、氏族制そのものを否定するか、乃至は、氏族の族内的統一精神を、國家の統一精神にまで昂揚せしめるかの二途によつて可能であらう。が後者の場合は、餘程優秀な民族に於いてのみ可能事で、朝鮮ではかかる一大家族國家意識は發生し得なかつたと同時に、又氏族制そのものを否定するが如き强固なる統一中心も現れなかつた。新羅は半島統一後に於いても、古代氏族制的なるものを多分に保留して居り、王氏高麗に至つてはじめて一系王室の成立を見たが、然し地方に於ける有力氏族卽ち豪族達を完全に統御することは甚だ困難で、天下こそ最高のものにして、爾餘の諸氏は常に王氏に對立して在るものとする彼等の意識は拔き去り得なかつた。勿論當時は唐の統一組織がその標識とされ、又佛敎が國敎的に信奉されたが

故に、氏族意識は寧ろ低調であつたが、儒敎時代たる李朝に入るや、氏族意識は再生され著しく分立的形勢が現はれて來た。この時代の中央政廳に於ける朋黨の分爭を顧るに、彼等儒輩は鄕里に於ける氏族的學派的團體力をその背後勢力として持ち、爲に政爭は中央のみに止らず、地方に於いても對抗勢力として相角逐し、遂に敵對する門族の間には、通婚をさへ禁ぜらるるに至つた。

かかる古代氏族精神の再生が、合理的基礎を持つ點で、近代的なることは旣にこれを言つたが、ここに於いて古代氏族の傳承した神話に代るに、學問が新しく社會的機能を以て登場して來た、卽ち神話にかかはる聖所——古代氏族の祭儀が行はれ、彼等の集族した聖域——にも比すべきものとして、學問修業の場たる書院が、特殊な近世的役割を以て發達して來たのである。書院とは、祖先及び先賢先師を奉祀する祠と、子弟を敎育する齋とが結合して出來たもので、中宗年間周世鵬なるもの、その任地慶尙道豐基郡に、朱子の白鹿洞書院に模して高麗朝の賢臣安珦を祀る爲に建てた白雲洞書院を以て、その嚆矢とされてゐる。書院は祠たる點に於いて氏族宗敎的性質を保持し、學齋たる點に於いて近代的性質を併せ持つものである。書院は宋代のそれを範としては居るが、朝鮮に於いて書院が流行し

た頃には、支那即ち明・清では已に衰退してゐる時であり、從つて朝鮮のそれは、支那に於ける流行の直接的影響によると云ふよりも寧ろ、宋の書院の種子が時を經た後、朝鮮近世の古代再生的傾向に促されて、採擇育成されたものと見るべきであらう。高麗時代には私學たる學齋が發達したが、當時は佛寺が時人の宗教生活の中心であつたが爲、學齋には祠たる宗教的面は全く現はれず又その要もなかつた。然るに佛教が排斥された李朝社會に於いては高麗時代の寺院の持つた機能の一面を、この書院が代行し、やがて寺領に相當する所領までも有するに至り、李朝の書院は高麗の寺院に代るものたるの觀を呈したが、然し古代の氏族宗教性の再生せる點、及び學閥の養成所となり朋黨の背後勢力ともなつた點に於いて、中世的なる佛寺とは著しくその性質を異にし、又黨族的なる點で、寧ろ古代氏族精神に接近して居るとも云ひ得る。李朝政爭禍の源泉たる朋黨は、文治政治の上に對立せる學閥であるが、この書院との結合によつて、地方的地盤を持つことになり、爲に中央政界のみならず、全國を抗爭の内に卷き込み、その上學閥關係と宗族關係とが相交錯して、分黨意識は社會生活の各面にまで波及したのであつた。今日の吾々からすれば、問題とするに足らない禮論が、黨爭史上の最高峰たりし所以は、彼等の宗族意識が、それを餘儀なくせしめ

たのである。

以上古代神教、佛教及び儒教を、それぞれ古代中世近世の指導理念として指摘し、それによつて各時代を類型化して理解せんと試み、且這般の三個の理念は、全然連絡なき別個のものでなく、相互に歴史的聯關の上に立つもの、即ち原初の固有精神が、佛教を通じて中世的に、又儒教を借りて近世的に自らを發展せしめたもの、換言すれば、民族文化のそれぞれの歴史的發展の樣相に外ならなかつたことを知り得たのである。然しかかる發展の後に於いて、古きもの即ち神教文化及び佛教文化が、近世社會から全く姿を消し去つたかと云ふに決してさうではない。時代の指導性を失つた前代の文化は、文化的殘滓として、社會の特殊部に殘存するが常であり、特に朝鮮の如き他律的傾向の強い社會に於いては、國外文化勢力の達し難いところに於いて、より多く古きものがそのままに殘存する傾向を持つ。即ち文化の自律的發展性に乏しいことが、朝鮮社會の或る部面に、文化の古代的樣相を比較的多く保存せしめる結果となつたのである。かかる文化の保存された面としてフォルク・ロアー folk-lore の榮えて居る民間社會を指摘することが出來る。民間文化即ち folk-lore が常に古代的なるものを含むこと、何れの民族に於いても等しく見られ、folk-lore てふ

言葉そのものが、その最初 antiquity の同意語として使用されたと云ふ言葉の歴史からも推知出來る。かかる一般的現象を敢えて朝鮮文化の特性として指摘せんとする所以は、この傾向が、特に朝鮮に顯著であり、かかる顯著さの故にこそ、文化的特徴たり得ると考へらるるからである、今日朝鮮の民間文化の研究が、學界の興味を喚起し、またその成果を收めつつあるは、朝鮮社會に於ける這般の文化的特徴に由來するものと云へよう。

さきに見た文化樣相の古代的と近世的、或は神教佛教的と儒教的の時間的對立は、ここに於いて民間と官邊の同時的對立として見ることが出來、或は又私的と公的、女性文化と男性文化の對立としても見られる。李朝政廳に於いては儒教を以て正教とされて居たが、にも拘らず永く王宮内に於いては王母王妃を中心として佛教が信仰されて居り、又巫女が尊信を受けてゐた顯著な史實に於いて、或は又民間に於ける男子の公的季節行事が儒教式であるに對して、私的な家祭が女子を中心として巫覡教的に營まれて居る現行民俗に於いて、這般の同時的對立或は文化の二重性を見ることが出來る。國字たる訓民正音卽ち諺文に就いても、類似のことを云ひ得る。一民族が自國の文字を創製することは、民族文化の獨立てふ點から考へて、重大な歴史的意義を持つものであり、近世に入つてからではあつ

たにしても、彼等が自國文字を持つに至つたことは、朝鮮の民族精神史上、理論的には特筆大書に價する事項でなければならないが、然るに事實はさうでなく、この優秀なる國字、恐らく世界に誇るに足るこの國字も、支那文化に最高價値を認めんとする事大主義的官邊の識者の前には、新奇の一藝たるに過ぎず、治世上何等の益なきものとして非難され、結局上申訴狀などの公的の文字たり得ず、ただ婦女童蒙下賤の利用するに止まり、教養ある男子は使用するを恥とさへ考へ、又かかる國字よりも漢字の音訓を借用して萬葉假名式に自國語の一部を現はす吏讀の方を、寧ろ權威ある官邊の文字として使用して居た。この漢字と吏讀と諺文の關係に類同したものを、朝鮮歌謠史に於いて漢詩と時調と民謠の間にも見ることが出來る。これら何れも支那文化と朝鮮文化、官邊と民間、男子と女子の文化的對立を顯著に示すものと云はねばならない。

三　神話と時代精神

過去の史實をそのまま傳へると云ふ點に於いては、神話傳說の類は固より正確な歴史ではあり得ない。然し神話傳說はそれを傳承する民族の理念や社會の實生活を常に反映し、

國家主權の他國への併合は誠に不幸な出來事であるが、それが平和裡に行はれたことは全く異例である。極少數反抗者の處分はあつたが、併合處理の大局は、李王家が日本の準皇族に、韓廷の重臣及び功勞者七十六名が華族に列せられたと云ふ一斑を以ても窺知出來る。朝鮮史古今を通じて、國家興廢の後を回顧すれば、唐軍に討伐された百濟・高句麗の最後は最も悲慘事であり、高麗に併合された新羅王族は、暫時慶州地方の一地方官として存續を許されたに過ぎず、また李朝太祖が革命を成就するの際は、高麗の末王恭讓王及びその二子を殺し、その他王氏一族を悉く海中に投ずるの慘虐も敢てした。明治維新の一大歴史變改を比較的平和裡に遂行して來た日本史的性格は、友邦韓國の終焉をも朝鮮史の異例たらしめたのである。

五　現代——總督政治とその解放（重版追補）

一　總督政治と朝鮮の近代化

日本の總督治下に置かれた三十五年間は、朝鮮史古今を通じて、經濟的社會的政治的ならびに文化的に最も大なる變化を受けた時代である。朝鮮が近代化されねばならぬことは世界史的必然であり、たゞそれを朝鮮みづから遂行するか、或は他者の力によるか、そのいづれかによつて朝鮮の現代史は展開しなければならなかつた。不幸にしてそれは後者即ち帝國主義的日本によつて推進せられた。そこに朝鮮史の宿命的な在り方である他律性が社會關係的な深さに於いて示されたのである。從つてこの時期の朝鮮は、急激な近代化の一路をたどる日本史の進展と切離しては理解出來ないであらう。日露戰爭以後の日本は資本主義の完成期であり、その軍事力と資本力が巨大に成長し、それによつてアジヤ大陸目指して强力な帝國主義的な政策が進められたのである。たとへそこには未成熟なものを含み、幾多の弱點と矛盾を藏して居たとしても、極東民族社會に對して斷然頭角を拔く近代勢力として嚮導權を握つたのであり、從つて日韓二國は併邦の形式をとつたけれども、事實に於いて後述のように朝鮮は殖民地化されて行つたのである。勿論そこには、歐洲列强がアジヤの後進民族社會を支配した殖民地政策とは、その施政方針と成果に於いておのづから異るものがある。

二つの異つた民族社會が一つの政治國家に統合されようとする時、もつとも問題になる

ことは、(イ)兩者の文化樣式の相違の度合、(ロ)社會進度の懸隔如何、の二點である。先づ前者について云へば、この二國は人種的文化的に深い關係を有し、從つてその文化樣式は根源的には可なりの近親性を持つものであつたが、他方その兩者のたどつて來た永い別別の歷史は、それぞれに異つた文化性格を養ひ、强い獨自の民族意識を育成して來たのである。朝鮮はながく中國の藩屛國として習慣づけられて來たけれども、今改めて日本に、しかも藩屛の形式に於いてではなくその完全な統治下に置かれると、この民族意識が强く反撥し、やがてそれが感情的基盤となつて民族運動が擡頭して來るのは必然である。次に社會進度の問題であるが、當時正に資本主義完成期にあつた日本の政策と、この著しく後進的な朝鮮社會との組合せが、共產主義を受け容れ、且それを實踐するのに恰好な地盤を用意したのである。この民族主義と共產主義とは本來別箇のものであるが、かゝる場合兩者の結びつくことは標式的な過程である。日本の朝鮮統治はその施政の適否如何に拘らずかうした兩面からの反抗を受けねばならなかつた。總督政廳は或は彈壓をもつて臨み、或は融和に腐心したのは這般の動きに對處する正面的な政策であり、また生活向上のために行はれた經濟的文化的な諸政策は、問題をより內面的に進めて行つたものと云へよう。だ

が然し、たとへ朝鮮の近代化には必要な處置であつたとしても、それが朝鮮自らによつてではなく、日本を主體として行はれたものである限り、朝鮮側からは批判されなくてはならぬ。それと共に日鮮間の問題は單なる政府當路者の政治行爲にかゝるのみでなく、廣く日本人が朝鮮に對して如何に考へ、或は如何に行爲したかにある。

初代總督寺內正毅以下九代阿部信行に至るまで、海軍出身の齊藤實を除いてはすべて陸軍出身者が總督に就任したと云ふ事實だけを見ても、その統治方針の指向するところを窺ひ得るであらう。先づ寺內の武斷專制を以て開始され、その間治安の確立、官紀の振肅、不良日本人の追放など、著しい成果があげられ、流血をもつてする黨閥的爭ひを操り返して來たこれまでの李朝政局とは全く面目を異にするものがあつた。しかしこの成果は朝鮮人の自由を犧牲にして得られた速成的なものであり、その武斷主義に對する朝鮮人士の不滿は、階級の如何を問はず、次第に鬱積され、次代長谷川好道總督の時に、その政治的不手際も原因して、大正八年(一九一九年)三月一日、所謂萬歲騷動(三・一運動)として爆發した。卽ち李太王の葬儀に關する誤解を契機に、獨立を願ふ同士達はかねてから準備されて居た獨立宣言文を發表し、先づ京城で韓國獨立萬歲を叫んでデモ行進が行はれ、忽

ちこの運動は全鮮に擴つて行つた。これまで頻發した朝鮮の政治騷動は局地的であり特定集團的であつたに比べて、この萬歳事件は地理的にも人的にも全鮮的であつた點に注意されねばならぬ。卽ちそれが民族運動的性格を持つてゐたことを證するものである。官憲は直ちに武力を以てこれを鎭壓し得たが、双方の死者五六一名に及んだことは總督政治の大きな汚點と云はなければならない。この騷動は日本統治に對する民族的反抗であり、日鮮の特殊事情に基くものであるが、他方第一次大戰後に於ける民族自決主義の思想がその背景的役割を演じてゐたことも見のがしてはならぬ。さうした點でこの運動の指導者の間では、國際的反響特に支持援助が期待されてゐたのであつたが、不幸その期待は裏切られ、海外の輿論は寧ろそれに對して批判的でさへあつた。それとともに、不成功の一層根本的な理由として、朝鮮民族社會が組織的精神を缺き、充分な準備なくして感情的に動いた點を注意し度い。それはとも角、これは朝鮮民族運動史上 remember 的事件として愛國者の胸裏深く銘せられ、かつは大きな教訓ともなつた。その後國內での運動は彈壓されたので民族運動の同志達はアメリカ或は上海などにのがれ、海外に運動の策源地が置かれた。

その後をついだ總督齊藤實は統治方針に大變更を試み、新しく文化政治を推進した。かかる政策變更はこれまでの武斷政治に對する自己批判の結果でもあるが、それとともにこの前後に於ける日本自體の政治的變針が注意されなくてはならぬ。卽ち第一次大戰後の世界的動向として國際間に合理主義平和主義の思想が支配的となり、日本に於いても政界は自由主義に改まり、民主主義的傾向を强調する所謂「政憲の常道」の政黨政治が行はれたのである。このやうな政界の新しい動向が齊藤總督を就任せしめたのであつた。從つて朝鮮に於いても言論の自由が或程度まで許され、かつそれは政論を好むこの國の知識人の求むところに應ずるものであつた。また限られた範圍ではあつたけれども、中央及び地方の行政に朝鮮人有力者を參加せしめ、其後この方針は年とともに擴大されて行つた。一方經濟主義政策により朝鮮產業が劃期的に發達するのもこの時期からであり、產米增殖計畫による農村の振興は最大の事業であつた。これより先、總督政治が開始されると直ちに土地調査事業が强力に進められ、王室・官衙以下兩班に至るまでの私的收納地——日本の古代莊園に近似した土地關係——を解放して、農耕者の私有を認める近代的土地所有權を成立せしめた。ところが九年間の年月と莫大な費用を投じて大正七年——一九一八年に完了したこの事業は必ずしも農民に幸ひしなかつた。卽ち古代的土地關係意識以上に出ない農民

がこの近代的土地所有權を理解することは困難であつたし、また同族的生活意識は私有權の成立に對する抵抗となり、結局特定の地主のみを太らせることになつた。この小作農民の增加とその貧困が爲政當局をして農村振興策をとらしめたのである。それは齊藤總督（第三代、第五代）及び宇垣一成總督（第六代）の時期に當つてゐる。勿論當時の產米增殖は日本內地の經濟的要請にも基くものであつたが、他方朝鮮の產業として最も可能で且收益の大なるものと考へられたのである。年々開拓される新耕地、それに新しい稻品種とすぐれた農業技術の導入は、米產の驚くべき增量となり、その大部が商品として日本內地に送られたのである。それが日本農村經濟をおびやかし、內地の政治問題となつた程に、朝鮮農業は經濟戰的優位を占めたのである。しかしこの米の商品化による利潤も、三分ノ二が古代的小作關係に置かれてゐた耕作農民の生活をうるほすものではなかつた。政府の農業開發とは數年おくれて、日本の工業資本の鮮內進出が次第に現はれ、その低賃金が有利な條件となつてそれを急速に發達させた。まづ南鮮に農耕社會を背景として輕工業が、ついで昭和期に入ると北鮮では大規模な水力發電事業の開發に伴つて重化學工業が長足の發達を遂げ、最も近代的な工業地帶たる將來を約したのである。このやうに朝鮮の南北が

種目を異にした產業を發達せしめた主な理由は、偶々その地理的資源的條件の故であつたが、そのことがそれ〴〵別箇の社會的環境の形成を助長せしめることになつた。この南北の subculture 的構成は、過去永きに亘つて朝鮮史が示すところの性格的相違にも照應するものを持つと共に、今日の南北兩鮮の政治形態に對するそれぞれに違つた社會的基盤ともなり得るのである。

昭和六年――一九三一年に起つた滿洲事變は日本の政局を大きく轉進せしめ、軍國主義者が指導權を握つた日本帝國は大陸侵略に乘出した。さうした日本の國策の下に朝鮮は戰略的兵站基地として重視され、人的物的兩面より國家總力戰の內に組入れられて行かねばならなかつた。勿論日本人もすべて軍國主義的思想を强要され、ファッショ的國家への獻身が色々の形で强制されたのであるが、朝鮮に於いては、まづ根本方針として內鮮一如の理想のもとに所謂皇民化運動が强行せられた。具體的には敎育方針の內鮮一貫、國語として日本語の常用、日本姓名への改姓、志願兵制度の實施、或は朝會における「皇國臣民の誓」の齊唱などが强要せられたのである。中でも改姓は、たとへそれまでに朝鮮人自らが求めて日本名を稱する傾向が見られたのであるけれども、古來氏姓制度を尊重し、かつそ

れがなほ生活上重要な意義を持つてゐる朝鮮社會に於いては、民族的な反撥を結果したのである。戰爭が次第に苛烈になるにつれて、志願制度が敷かれ、勞務徵用者の割當ても嚴しくなつて來た。愈々太平洋戰爭に突入した日本の對鮮政策は最後の焦慮を示したが、昭和二十年——一九四五年八月十五日日本の降伏によつて終止符が打たれた。卽ちカイロ、ポッダム兩宣言によつて朝鮮は完全に解放せられ、併合以來久しく待望した獨立の日が與へられたのである。

二　獨立と內戰

自ら戰ひとつたのではなく、聯合國の戰勝副產物として與へられたこの獨立が、朝鮮自らの手でどのやうに仕上げられねばならないであらうか。併合期三十五年間に亘る朝鮮人の政治的空白は何よりも大きなハンディキャップであり、また併合前の朝鮮政局の實情を顧みても容易ならざる課題である。朝鮮が當面する國際情勢は未曾有のけはしさであり、國外諸勢力抗爭のさ中に置かれている。今日の朝鮮も過去におけるそれに劣らず、國外諸勢力の質と量とによつて規定せられるところ多大なるを想ふ時に、それに反應する朝鮮民族社會の內容とその性格を今一度反省して見なくてはならぬ。

まづ三十餘年の日本の統治が朝鮮社會をどのやうに變化させ、又どのやうな問題を殘して行つたであらうか。明治維新以來日本自身がたどつて來た近代化の過程にも、資本主義國家として社會的未成熟から來る矛盾を內藏してゐたのであるが、朝鮮の近代化はそれとは比較にならないほど跛行的であつた。日本は、明治維新までの時期に、成熟した封建社會の內から初期資本主義の準備を自らに於いてなしつゝあつたのであるが、朝鮮社會は李朝末期に於いても、なほ近代の前段階たる封建社會さへ未だ成立せず、古代的な經濟社會的關係に停滯してゐたと云つても過言でない。近代產業的なものは勿論何らの胎動も示してゐなかつたし、前述のやうに土地關係はその古代性を標式的に示してゐたのである。日韓併合はさうした社會狀態下の朝鮮に、完成期にあつた日本の資本主義を持ち込んだのである。しかも民族的なレジスタンスと云ふ重い制動機をつけながら、他律的な近代化の途を進ませられたのである。朝鮮社會自らが資本主義を身につけて步調を合はせて行くが如きは、殆んど不可能であつた。一門一族に賴る族制意識が個人の自覺をはゞみ、時にはそれが近代化に伴ふ生活不安に對する防衛としての役割を持つたのである。個人生活の自由

獨立の意識も成長し難く、從つて日常生活に於ける貨幣の取扱ひと云ふ卑近な生活面に於いても、投資と云ふ觀念の如きは、誠に緣遠い社會であつた。それは必ずしも貧困の爲ばかりでなく、より根本的には近代意識の成長如何に拘はるものと云はねばならない。二國は併邦の形式をとりながら、前述のやうに、朝鮮が殖民地化されざるを得なかつた原因の一はこゝにある。全く朝鮮は日本資本主義の搾取にさらされて居たのである。最初の農地調査にしても、後の工業振興にしても、それが朝鮮社會に與へたものは、小作人、自由勞働者、工場勞働者の激增であつた。これらの事態は朝鮮に於ける共產主義の受容とその成長に恰好な地盤を準備しつゝあつたと云へる。それは最も可能性のある朝鮮解放の實踐道であり、かつそこでは獨立運動として成長したのである。從つて共產主義者は民族主義者であり、愛國主義者である。右の社會經濟的環境とともに、朝鮮の民族性格もさうした運動への適性を示してゐる。卽ちその思考傾向は實證的歸納的であるよりも、激情的であり、イデオロギー的なるものを偏好するのであつて、それは永い李朝期の思想界が朱子學に一邊倒した歷史から想察することも難くない。またその他律的歷史は抗爭性と民族的英雄への渴望と云ふ性格を與へた。今次の獨立後新聞紙上に次々と英雄の名を冠する人物が

出沒してゐるのもその故であらう。これらの經濟的、思考的、性格的諸條件は、朝鮮の民族的共產主義國家への前進が最も自然であることを想はしめるものである。勿論萬歲騷動以後總督府の彈壓政策のため共產主義運動は許さるべくもなかつたが、引きつゞき小作爭議や工場ストライキ或は學生運動として現はれ、またロシヤ共產黨と連絡をもつ「高麗共產黨」ついで「朝鮮共產黨」が成立して半島內の各種爭議を指導した。これに對し政府は一九二五（大正十四）年治安維持法を施行して、四次に亘る共產黨員の檢擧を行ひ、滿洲事變以後は一層徹底した方針がとられた。國內で足場を失つた共產主義者は國外特に滿洲に根據をうつし、在滿鮮人を下部勢力として黨の育成に努めた。その間金日成の活動には目覺しいものがあり、「東北抗日軍」を結成して、武力的にも日本軍に反抗しつゞけ、また第二次大戰にはソ聯將校として獨ソ戰線にまで活躍した。

勿論民族主義者は必ずしも共產主義者に限られたわけではない。萬歲騷動以後民族運動の指導者は米國或は上海などに亡命して運動をつゞけた。中でも徹底した反日愛國者李承晩は騷動の直後上海に「大韓民國臨時政府」をつくり、日華事件の擴大した頃には金九は重慶政府と結び、朝鮮人師團を編成して抗日戰に參加した。これらの運動はその背後關係

から云つても、またその方策から云つても、反共的な性格を持つものであつた。滿洲事變以後日本の大陸侵略が順調に進んだ頃には、朝鮮人の多くはそれに同調する親日的行動に出で、上記の如き少數者の反日運動はその實効をあげ得なかつたのであるが、日本の敗戰によつて朝鮮が解放されると、民族的信望から云つても、またその背後勢力からしても、新しい朝鮮の指導者として金日成・李承晩・金九などが迎へられたのは當然である。しかしこれら指導者の經歷と思想から云つても、また併合以前の朝鮮政界の黨爭的性格を考へても、その前途に多くの困難が豫想されたのであるが、それよりも事態を一層不幸にしたのは米ソ兩國によつて朝鮮が南北に二分されたことである。卽ち日本の敗戰處理の第一歩として、米ソ兩國がこの半島國を占領し、軍事的便宜から北緯三十八度線を兩者の占領境界としたことである。これは勿論偶々人爲的に劃されたものであるけれども、北鮮と南鮮が過去の永い歷史を通じて示してゐる民族的經濟的社會性格を考へる時、そこに偶然ならざる歷史的意味が注意されるのである。滿鮮境界境域を一圓的に勢力基盤とする獨裁的武力が北鮮を支配すると云ふ形勢は、一再ならず歷史の證示し來たところである。特に南鮮よりも一層後進的な社會に資本主義的大工業が急激に勃興し、かつ中產階級が殆んど存在

しない北鮮が、滿洲東邊地區に興つた金日成の共產主義勢力の支配下に屬したことは最も自然な成行きである。一九四六年二月北鮮人民委員會が成立して以來、共產主義政策が着着と實施され、又その武力裝備もソ聯の援助のもとに强化されて行つた。一九四八年に入ると憲法が成立し、九月には「朝鮮民主主義人民共和國」が正式に樹立して金日成を首相に選任した。

南鮮に於ける政況は北鮮のやうには順調に進まなかつた。南鮮は農耕社會的特色を持ち古來民主主義的な傾向を持つ社會ではあつたが、固よりアメリカの指導する近代民主主義政權を樹立するだけの社會進度にあるとは云ひ得ない。こゝに南鮮の政治的弱點とアメリカの援助政策の困難さの根本原因がある。一九四八年五月アメリカの監視下で總選擧が行はれ、六月には國會が出來、七月に憲法公布により「大韓民國」が成立した。大統領には親米排日主義の巨頭李承晩が就任して一段落を告げた。だがイデオロギー的に全く相容れない南北兩政權の對立は獨立完成の狀態とは固より云ひ得ず、また色々な方式による南北統一への動きが、却つて朝鮮の政治不安を倍加して行くのである。特に社會進度と開きのある南鮮の自由民主主義的政治形式は、北鮮からの共產主義攻勢の浸透する多くの間隙を

藏してゐる。それは思想攻勢からやがてゲリラ攻擊に進展して、南鮮の治安は次第に惡化し、一九四八年四月の總選擧には、濟州島に共產主義者の叛亂が起り、麗水・順天に於ける國家軍隊の叛亂にまで發展した。時を移さず政府の武力討伐によつて一應の處置は得られたけれども、ゲリラ活動は南鮮全域を浸潤して行つた。このやうな治安の攪亂がもたらす慘果は、例へば右の濟州島事件について見るに、二七、〇〇〇人の死者を出してゐることからも想像するに難くない。この數字は日本統治の間最大の犧牲を出した萬歲事件の死者五六一名（双方）の五〇倍であり、また日本の明治時代の最大の叛亂である西南戰爭でさへ兩軍の死者はその半ばにも達しないのである。このことは何にもまして、朝鮮の政治性格と社會主義的騷亂の深刻さを語るものと云はなくてはならぬ。

何人も念願する南北の政治的統一に關する努力は、國內の政治家や憂國の有識者によつて一再ならず試みられたし、また國外では米ソ二國間でも國際連合に於いても努力するところがあつたが、現實的にはこの至當な念願よりも米ソ二大陣營の對立が一層大きく働き、事態の解決を困難ならしめた。南北が米ソ二國の軍事占領下にある限り統一朝鮮の實現は不可能であるから、朝鮮の要望によつて、一九四八年から翌年にかけてソ米兩軍は半

島から撤退し、形式的には朝鮮は朝鮮自らの手にゆだねられたが、實質的には米ソ二國のそれぞれ南北兩政權に對する援助政策はなほもつゞけられた。その間フィリッピン・日本の線を防禦線とする米國の對鮮援助は消極化したのに反比例して、北鮮の共產主義陣營の活動には積極的なものが見られた。これらの間に於いても南北統一の政治的諸工作がつゞけられたが、大勢は左翼的黨派が主動權を握る傾向が次第に明らかになりつゝあつた。かくして祖國統一戰線の最後段階として、一九五〇年六月二十五日北鮮共產軍は三十八度線を突破して南鮮への進擊を開始し、こゝに今次の動亂となつた。

この動亂もこれを樣式的に見れば朝鮮史的類型に屬するものとして理解することが出來るが、その背後勢力が世界的につながる複雜さを持つてゐること、近代戰の苛烈な殺戮は數百萬の人命を損ひつゝあるなどの點で半島有史以來の難局であり慘事である。顧みるに日鮮兩民族は戰はずして併邦し、また戰はずして朝鮮は解放された。このけはしい國際情勢の只中にあつて二國の相依り相助ける善隣の道のみが自存の道である。既往の日本の行動には責任を負ふべきものが少くないが、朝鮮統治の得失と功罪を正しく論評するに足る客觀的な perspective を得る時期には未だ達してゐない。たゞ日本統治の僅か三分の一世

紀の間に、朝鮮人口が一千三百萬から三千萬近くに增加したと云ふ客觀的な指數をあげ、併せてこの人たちの平和な幸福の日が一日も早く訪れることを念願して擱筆する。